

## セッション「ピグー厚生経済学の再検討 — 『富と厚生』 出版百周年」

組織者 本郷亮（関西学院大学）・山崎聡（高知大学）

20世紀を通じて、ピグーはさまざまな方面から批判されてきた。ピグー厚生経済学の評価はあまりにも低く、その研究も非常に停滞していたと言わざるをえない。しかし21世紀の今日、ピグーを再評価する気運が世界的に高まっており、周知のようにわが国でも、本格的・文献実証的な研究が急速に進められている。そうしたなかで、『富と厚生』（1912年）の出版百周年に当たる今年、ピグー厚生経済学の諸々の本質的側面を問い直すには重要な節目の年であるように思われる。同書は、ピグー厚生経済学の最初の体系書であり、『厚生経済学』（初版、1920年）の「真の初版」（D.コラード）とも言われている。

本セッションの最終課題は、最新のピグー研究の成果を総合すると共に、今後の研究の進むべき道筋を展望することである。たとえ本セッションによって、これらの課題を直ちに達成することができないとしても、われわれは、本セッションがこれらの課題の達成の大きなきっかけとなることを期待する。またわれわれは、マーシャル研究やケインズ研究に比べての、ピグー研究の後れを取り戻すことによって（この相対的後れはケンブリッジ経済学派全体の研究の1つのボトルネックになっていた）、同学派全体の研究にも大いに貢献するだろうと期待する。

ピグーの厚生経済学（あるいは厚生経済思想）とは一体何であるのか。何を規準に、どの範囲までを厚生経済学と見なすべきなのか。この点については、われわれピグー研究者でさえ、明確な唯一の答えを出すことは難しい。その最大の理由の1つは、彼の著作物が膨大で多岐にわたるからである。確かに代表作は『富と厚生』や『厚生経済学』などであるが、これらのみをもって、彼の経済思想と同定することはできない。

ピグーは、経済学の科学化に腐心したと言われているが、そうした理論化・精緻化の過程でオミットないし留保された部分にも光を当てなければ、彼の厚生経済学を理解・評価することはできないだろう。その出発点には、まず社会改良の情熱がある。これは彼の哲学・倫理思想（あるいは「ヴィジョン」）である。次いで、社会改良を実現するための科学的分析作業が来る。これが経済理論に相当するだろう。ピグーによれば、両者は相互依存の関係にあり、これらが目的論的観点から統合されることによって厚生経済学が構築される。したがって、（少なくとも）倫理的側面と経済理論的側面を分けて考察することが必要である。

本セッションは以下のような5つの報告からなる。各報告者の間には、むしろ見解の一定の相違も見出されるだろうが、それらは本セッションを妨げるものではない。見解の相違点を明確に認識することは、今後の研究の原動力にもなる。

第1報告（高見）では、従来ほとんど着目されてこなかった1つの本質的問題が扱われる。すなわちピグー厚生経済学の形成期の社会的・政治的な環境である。第2報告（山本）は、初期ピグーの外国貿易論を考察し、ピグー厚生経済学の1つの源流をそこに見出そうとするものである。第3報告（本郷）は、『富と厚生』の形成過程（貧困論や失業論）の考察を通じて、福祉社会論の古典という同書の1つの本質的側面を示そうとする試みである。第4報告（吉原）は、経済的厚生（効用）の客観的対応物とも言われる「国民分配分」を、純（net）量として把握するさいの、「資本減耗」の問題を扱い、ここにピグーの1つの理論的貢献を見出そうとするものである。第5報告（山崎）は、ピグー厚生経済学の倫理的側面に着目し、経済的厚生（効用）に基づく分配規準と並んで、必要充足（公正）に基づく分配規準が存在することを論じる。